

男女共同参画シリーズ その4

高専教育における男女共同参画とその効果

Analysis of Educational Effects of Gender Equality at the National Institute of Technology

穴戸 道明
SHISHIDO Michiaki

1 はじめに

近年になり「持続可能な開発目標（SDGs）」という言葉が社会に浸透してきている。2015年9月に国連総会で採択されたそれには17の大きな目標が掲げられ、そのひとつとして『ジェンダー平等の実現』が含まれ、すべての女性と女児のエンパワーメントをねらいとしている。では何故、今、男女共同参画の考えが必要なのだろうか。「男は稼ぎ、女は家庭を守る」とする認識が、昭和の高度経済成長期には支配的だった。「これは男の仕事、これは女の仕事」という見方があった。加えて日本の伝統文化においては、たとえば大相撲の土俵のように、女人禁制の“しきたり”も存在する。多くの面で女性の社会進出の機会には、見えざる“ガラスの天井”が存在していた。さらには、男女の身体機能や脳の機能には明確な差異があり、これによる得手不得手は確実に存在する。このように、過去の歴史を振り返ると男女差別が好ましいことではないとしながらも、その改善傾向の速度は鈍い。本シリーズでも男女共同参画に対する考え方については、SDGsが掲げられる以前（2014年）にも、固定役割分担意識や科学技術系専門職の実態についてきめ細かく分析／解説した報告がなされている。

SDGsを耳にする機会の増加は、ダボス会議（2017年）でその強大な経済効果が発表されたタイミングと符合している。少子高齢化の課題を含む今、再び「Made in JAPAN」を旗印に、科学技術のフロントランナーとして日本が世界を牽引するためには、固定的性別役割分担意識に縛られないこと、才ある女性の活躍機会を阻害しないことなどは不可欠である。翻って高専教育に目を向けると、次世代を担う技術者を育成するうえではベテランの技術者らと意見交換し、それを考

察することは教育的意義の高い極めて貴重な機会といえよう。こうした機会として、2021年技術士全国大会（創立70周年記念）第一分科会（ジェンダー平等）が開催され、著者の担当科目（技術者倫理：専攻科1年）と連携して学生が女性技術士と討論を行う機会を設けることができた。本稿ではその教育効果について紹介する。

2 聴講参加の概要

第一分科会は、「ジェンダー平等」をテーマとして開催された。参加プログラムは基調講演および講演を聴講後、各4～5名で構成されたグループに分かれ、講演聴講からの気づきや抱負について意見交換を行うものだった。そして質疑応答を経て分科会総括・閉会となった。なお、グループ討議は遠隔開催のためTeams上で個別チャットにて行っている。参加した学生は鶴岡高専専攻科1年21名（うち女子2名）であった。

本分科会に参加聴講した学生の教育上の効果を検証するため、参加後の学生にアンケートを行った。回答項目は「総合的にみた今回の講演会への印象（満足度）」、「ジェンダー平等に対する理解の深さとアクションマインド」の2点である。

3 参加における教育効果

図1に総合的にみた講演会参加の満足度を示す。“5点（大変有意義だった）”と回答した学生が52%と最も多く、次いで“4点（満足する内

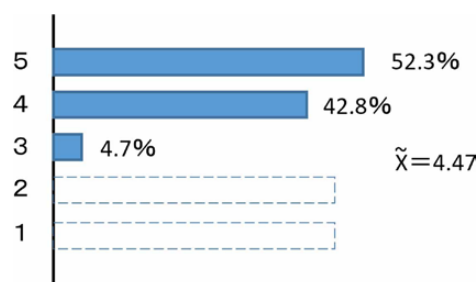


図1 講演会参加の印象（満足度）

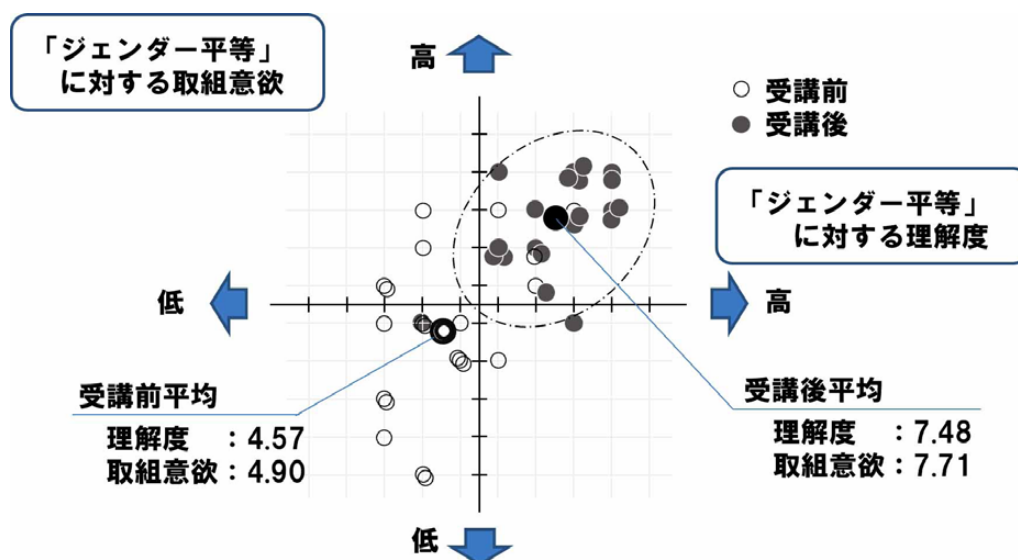


図2 ジェンダー平等に対する理解の深さとアクションマインド

容だった)”との結果が得られ、平均値は4.47と高値を得た。自由記述コメントとして、「ジェンダー問題を今まで意識したことがなかった」、「海外に比べ、データ上で無視できないほど大きなジェンダー差があることを再確認するとともに、知識や理解が得られ、貴重な経験となった」との回答が得られている。

図2にジェンダー平等に対する理解の深さとアクションマインドを示す。アンケートは各項目に対して10段階で行われ、横軸にはセッションテーマである「ジェンダー平等に対する理解度」の深さを表し、縦軸には「自身の取組意欲」を表しており、聴講参加前後の2つのデータから、その教育効果を分析している。

まず、聴講前はジェンダー平等というテーマやキーワードに対して、平均で理解度4.57、取組意欲4.90となり、中央値よりやや低いとする傾向が得られ、僅かだが消極的な意識が窺える。また、広く分散した発散傾向のプロット結果から、初めの各学生の聴講テーマに対する意識は、理解度も取組意欲もばらつきが高いことが窺える。

次いで、受講後に着目すると、平均で理解度は7.48、取組意欲で7.71となり、テーマに対する理解や関心の高まりが向上していることが窺える。

さらに、データのばらつき（分散）は受講前のそれに比較し、大幅な収束傾向がみられ、教育のねらいに対して学生の意識の“寄り添い”が顕著

になったといえよう。今回の聴講参加における女子学生は2名と少なかったが、2名とも受講前からジェンダー平等に対する関心を高く持っており、受講後はさらに高まっていた。

4 今後の展望

科学 (Science) のねらいが“不思議の解決”であるのに対し、技術 (Technology) のそれは“新未来の開拓”である。高専では中学校卒業以降から5年（専攻科を含めれば7年）にわたり、早期から科学技術に触れ、基礎の確立と専門技術を修得する。しかしそこで“理屈の理解”にとどまらない創造力を備えるためにはリベラルアーツ教育が不可欠である。それらを含む教育インフラの充実を図るひとつの側面として、ベテランの女性エンジニアと忌憚ない意見交換ができるこの男女共同参画推進委員会の活動は極めて意義深い。

今回の試みを紹介した際、ある本科の女子学生は「どう見ても女性は男性と同等に扱われる社会に見えない」と話し就職活動を迎える。単なる数の平等ではなく能力評価の平等を促進し、次世代につなげる教育展開検討を課題として進めたい。

穴戸 道明 (ししど みちあき)
技術士 (機械) / 総合技術監理部門

鶴岡工業高等専門学校
創造工学科情報コース 教授
e-mail : m-shishido@tsuruoka-nct.ac.jp

